

吉備大臣入唐譚方術考

——『江談抄』に見える院政期文化の一断面——

善養寺 淳 一

はじめに

古代の学者、政治家として著名な吉備真備（六九五～七七五）は、阿倍仲麻呂と同時期に唐に渡り、十七年に亘り幅広い分野の学問を修め^①、多くの文物を将来し、我国の文化の発展に寄与した人物である。真備は帰国後、八十一歳で薨去するまで奈良朝の政治家として重きをなしたが、後世その学才と該博な知識は、実像を基に伝説化される。『続日本紀』巻第十二の真備帰国後の記事には、「唐礼^②一百卅卷、太衍曆^③一巻、太衍曆^④立成十二卷（以下略）」と献上した文物が記されていたものが、平安後期成立で、大江匡房撰者説もある『扶桑略記』成立時では、唐土で学んだ学芸は「三史五經。名刑筭術。陰陽曆道^⑤。（以下略）」等十三道に及んだと真備像の増幅、変容が認められる。この真備像は、院政期の碩儒大江匡房（一〇四一～一一一一）の言談書『江談抄』「雑事」（一）「吉備入唐の間の事」では唐人を圧倒する物語の主人公として超人ふりを發揮する。所謂吉備大臣入唐譚である。

匡房が、晩年に『江談抄』や『本朝神仙伝』を記した点に関しては、平林盛得氏の論考に詳しいが、匡房は貴族にとつて重要な典札故実を記した日記を、亡くなる前に火中に投じたとしている。その理由は知るべくもないが、「最

晩年のころの談話」として『江談抄』を筆録させている。平林氏は、匡房が死後の生所を示していない点につき、その再生地として、「極楽浄土」ではなく、「神仙の世界への再生はいかがであらうか。」と述べている。この言葉は、匡房の人物像の解明に繋がる視点としてまことに示唆的であると言えよう。

本稿ではこの入唐譚を考察するものであるが、匡房が『江談抄』に於いて、吉備大臣を大江家学の始祖として位置付けようとする志向が、本話に胚胎している問題については、既に拙稿にまとめている⁶⁾。本稿では、『江談抄』に於いて、現世と異界の両方に活躍する吉備大臣の方術に焦点を絞り、方術という機構による異界への越境と、方術各々の思想的源泉を探り、本話に於ける方術の役割を考究したいと思う。また、儒者である匡房の異界との関わりや、院政期文化の諸思想の複合的様相も考察したい。本稿における方術の意味については、その背景として陰陽道や道教に言及することになるが、陰陽道の成立に遡れば、民間道教もその一要素であるから、本稿では道教と密接な関係にある陰陽道の方術、という意味として扱うものである。また『江談抄』が、大江匡房の多岐に亘る関心事と深く関連している点や、この著作が匡房の他の著作の思想的背景に繋がる、という位置付けも視野に入れつつ、この入唐譚を語る匡房の儒学者という枠に収まらない新たな匡房像というものを照射したい。

一、「吉備入唐の間の事」の粗筋と方術

最初に「吉備入唐の間の事」の要約を掲げておきたい。

吉備大臣は唐に渡った後、その学識に恐れをなした唐人により、楼に幽閉されてしまう。唐人達は真備の学才を試そうと様々な難題を課すのであるが、鬼と化した阿倍仲麻呂の霊の助けや、本朝の仏神の靈験により、これらの難題を解いて唐人に勝つという粗筋である。

次に、「吉備入唐の間の事」の構成要素と、そこで使われる方術を、粗筋にそつて列挙すると次のとおりである。(本文は、岩波書店、新日本古典文学大系32、山根對助・後藤昭雄校注『江談抄』に拠り、訓読及び段落の区切り方も同書に拠る。)

- ① 鬼の出現 (第1段) と援助 (第2・3・4・5段) …… (一) 隱身術・(二) 見鬼術
- ② 『文選』の試問 (第3段) …… (三) 飛行術
- ③ 唐人との囲碁戦 (第4段) …… (四) 瀉術
- ④ 野馬台詩の解説 (第5段) …… (五) 唐土の日月を封じ込める術
- ⑤ 吉備説話の伝承 (第6段) …… ⑤は、匡房がこの吉備説話は、故橘孝親朝臣(匡房の外祖父)が先祖から語り伝えられたとする伝承の系譜である。

二、隱身術と見鬼術

入唐した吉備大臣は、その学識を恐れた唐人により棲に幽閉されるが、そこに現れたのが阿倍仲麻呂の幽鬼であった。この部分の本文を引いてみる。

吉備大臣入唐して道を習ふ間、諸道、芸能に博く達り、聰恵なり。唐土の人すこぶる恥づる氣有り。(中略) 深更に及びて、風吹き雨降りて、鬼物伺ひ来たれり。

吉備隱身の封を作し、鬼に見えず、吉備云はく、「何物なりや。我はこれ日本国王の使なり。王事監きこと靡し。鬼何ぞ伺ふや」と云ふに、鬼云はく、「尤も悦びと為す。我も日本国の遣唐使なり。言談承らむと欲ふ」と云ふに、吉備云ふやう、「しからば早入れ。しからば鬼の形相を停めて来たるべきなり」と云ふに随ひて、鬼帰り入りて

衣冠いこうを着けて出で来たるに相調するに、鬼おにまづ云はく、(以下略)

右の本文の記述から、次の二つの術を読み取ることができる。

(一) 隱身術 (吉備大臣の「隱身の封」)

(二) 見鬼術 (吉備大臣が鬼を見ることができ、鬼と対話する術)

まず、(一)については、吉備大臣は、幽閉された楼にいて自分に近付く鬼の気配を感じ取り、「隱身の封」で自らの姿を隠してしまう局面で使われている。これは、本文の「鬼に見えずて」から、鬼から見えないようにするための一種の護身の呪術であることがわかる。

この隱身の封については、新日本古典文学大系の脚注は「姿を隠す呪術の固め。」とし、『日本霊異記』中巻「己おのが高徳かうとくを恃たの賤いやしき形の沙弥しゃみを刑うちて現うつに悪あしき死を得る縁このもと第一いち」の次の例を挙げている。

誠まことに知る、自おのが高徳かうとくを怙たのみて彼その沙弥しゃみを刑うち、護法ごほふ囉嘛らまみ善神ぜんじん慍いんみ嫌きらふ、袈裟けさを著きたる類ともがらは賤いやしき形なりとも恐おそりざるべからず、身を隠せる聖人せいじんの中に交まじるが故ゆゑなり、と。(傍線引用者)

この話は、長屋王(8)が、聖武天皇の勅により行つた元興寺の法会に現れた僧の頭を笏で打ち、その場に居合わせた人々が、よいことあるまいと囁きあい、その二日後、王は謀反を企てたと密告され自害した、という話である。傍線部については、日本古典文学全集の頭注に、「仏・菩薩がその本姿を隠し、人間(時には下賤の姿で)」として現れること(9)としている。「固め」とは、『今昔物語集』巻第十一「玄昉僧正、巨唐、伝法相語第六(10)」に、吉備真備が藤原広繼(嗣)の悪霊を宥める場面で、真備が「陰陽ノ術ヲ以テ我ガ身ヲ怖レ無ク固メテ」とあること(11)から陰陽の術であり、また、『宇治拾遺物語』上巻二十六の「清明、臧人の少将を封する事」でも、呪い殺されそうになっている臧人少将を、安倍清明が「身固め」して守つた話に出てくる。この「身固め」は、「身を健全に守るための呪法。身を守るための陰陽師の加持法(12)」の意である。

坂出祥伸氏は、このような隱身術を説くものとして、敦煌文書の二篇の経文(「湘祖白鶴紫柴遁法」、「太上金鎖連

環隱遁真訣)があることを指摘している。更に、『道藏』の精要を収載した『雲笈七籤』(北宋、張君房編)卷五三に、「太上丹景道精隱地八術」として、藏形匿形、乘虚御空、隱淪飛霄、出有人無、飛靈八方、解形遁變、迴晨轉玄、隱景舞天の八方を紹介しており、吉備大臣の方術もこうした類の術ではないかと考えられる。

吉備入唐譚では陰陽道を主とした方術が語られるのであるが、後述する陰陽道の成立の事情を考えれば、その方術の源泉は、陰陽道以外の思想にもあるということも考えられる。例えば「隱身の封」について、前述の『日本靈異記』(日本古典文学大系) 脚注「仏・菩薩がその本姿を隠し」の説明のように、仏典では、「隱身(オンシン)」或いは「隱形(オンギヤウ)」は、隱身の術の意味であり、また「隱形藥」或いは「翳身藥(エイシンヤク)」という人の身を隠す薬があり、印度の仙方であるという。この薬(仙方)を使った話には『龍樹菩薩傳』があり、『今昔物語集』巻第四「龍樹」俗時、作「隱形藥」語第二十四」でも、龍樹が在俗時この薬を使い宮中美女が侵凌された話となっている。龍樹の我が身を隠す術については、『今昔物語集』は「外道ノ典籍ノ法」(仏教以外の異端の学術文献)であるとしており、方術の思想的源泉は、更に広汎な文献への広がりも考えられるだろう。

次に(二)については、この話に登場する鬼は、第2段後半で、鬼が自分も遣唐使を務めた安倍氏であり、この楼で餓死し鬼になり子孫の行末を案じている、と話していることからこの鬼の属する世界は冥界であり、吉備大臣はあの世という異界と向き合う、或いは異界そのものに一時的に入り込むことができる術の使い手と考えられる。このように鬼が見えるという術は、どのようなものなのか。私見ではこれは「見鬼術」と考えられる。

『抱朴子』内篇論仙篇に、

〔原文〕夫方術既令鬼見其形、又令本不見鬼者見鬼、(以下略)

〔訓読〕夫、方術は、既に鬼をして其形を見せしめ、又、本、鬼を見ざる者をして鬼を見せしむ。

〔和訳〕そもそも、術を使えば、鬼神に姿を現わさせることができる上に、本来幽霊を見ることのできない人に幽霊を見させることもできるのである。

とあるものであろう。同じく『抱朴子』内篇黄白篇でも次のようにこの術に言及している。

〔原文〕夫變化之術、何所不爲、蓋人身本見、而有隱之之法。鬼神本隱、而有見之方。能爲之者往往多焉。⁽²²⁾

〔訓読〕夫^{それ}變化之術、何の爲さざる所有らん。蓋、人身は本^{もと}見るも、之を隱すの法[※]有り、鬼神は本^{もと}隠るも、之を見^{あらは}すの方有り。能く之を爲す者、往往にして多し。⁽²³⁾〔※「方」を、原文の「法」に改めた。〕

〔和訳〕かの変化の術は何でもなれる。思うに人間の体はもと目に見えるもの。しかしそれを隠す方法がある。鬼神はもと目に見えない存在。しかしその姿を現わす方法がある。この術の出来る人は数多くある。⁽²⁴⁾

この鬼神が見える術は、『今昔物語集』巻第二十四第十五に登場する陰陽師賀茂忠行（『安倍清明の師』の「子供」の頃に鬼神を見ることはなかった。陰陽道の術を習ってから、やっと目に見えるようになったものだ⁽²⁵⁾」との発言から、やはり陰陽道術の一つと考えられる。

そもそも陰陽道の成立事情を考えれば、吉備大臣の陰陽道術の中にこのような道教由来の術も考えられる。前掲の『抱朴子』は神仙思想の書であるが、この神仙思想の位置付けには諸説あり、通説的には道教の中核的要素とされる。⁽²⁶⁾この道教は、例えば次に引用する中村璋八氏の概念規定⁽²⁷⁾のように、多くの思想、信仰等の要素から成る宗教であると言える。

道教とは如何なるものであるか、と言う道教それ自体の理解に就いては、種々の説があつて、必ずしも統一した見解が存しない。（中略）ここでは、漢民族の固有な宗教で、その教理は、不老長生を求める神仙説を中心に、中国の伝統的な思想である儒教、外来思想である仏教を始め、老荘思想、讖緯思想、陰陽説、五行説や、さらには占卜、占星、天文学などの説、本草、経絡などの原始医学や健康法、巫祝の呪術などの多くの要素を取り入れて形成された雑多なものを含み、その主要な目的は、漢民族が最も希求する不老長生を如何にして実現するかという極めて現実的な宗教であつたと考える。

この神仙思想や諸々の信仰、占い、健康法等を含んだ雑多なもの集大成である道教は、古代の大陸との交渉によ

り我国に伝来したと考えられるが、それは中村氏も言うように、「日本の自然や風土の中で発生した民間信仰の中に混入し、思想・信仰としての道教そのものは、仏教や儒教とは異なって断片的な思想や要語はともかくとして、明確な信仰そのものとしては定着しなかった」とされる。中村氏の論考では陰陽道を司った平安末の賀茂家采(一〇五五?—一一三六)の『陰陽雜書』には、「急々如律令」という、元々漢代の公文書であった祈禱文言が見え、これが日本の陰陽道や修験道にもしばしば見えると指摘している。⁽²⁸⁾この賀茂家采の時代は院政期にあたり、吉備入唐譚が語られた時代とも重なる。

村山修一氏は、院政期陰陽道の特徴として、(以下引用者要約)①陰陽道界がそれ以前の摂関家より上皇の支配を多く受けるようになったこと(例えば頻繁な改元)。②前述の陰陽頭賀茂家采が優れた陰陽家の指南書『雜書』を著わしたこと。③安倍清明五代の孫安倍泰親のような傑出した陰陽家が出ていること。④大江匡房などの学者も陰陽道に造詣が深かったこと。(例えば藤原通憲(信西)の易に関する文献の蒐集(稿末の注に『通憲入道藏書目錄』抜粋掲載)⁽²⁹⁾を挙げており、右のような特徴が認められるこの時期が、「日本陰陽道形成の頂点をなす時期」⁽³⁰⁾であることも興味深い点であると言えよう。

右の(一)、(二)の考察から理解できる点をまとめると、吉備大臣は、初対面の鬼から我が身を守るために、隱身の封の呪術を使ったことになる。また鬼が見える術により安倍仲麻呂の幽鬼を見ることができ、それは異界と向き合うということを意味するものと考えられる。吉備大臣は、この冥界に属する鬼と対話し、その協力を得ることで、唐人の課した難題を乗り越え、唐人を圧倒することになる。

三、飛行術

唐人たちは、吉備大臣に難解で知られる詩文総集『文選』を読ませるといふ難題を与えた。吉備大臣は鬼の助けにより、『文選』の講義所へと鬼と共に飛行し、そこで儒者の講義を聞くことができた。この部分の吉備大臣と鬼とのやりとりは、次のようなものである。

その夕、また鬼来たりて云はく、「この国に議る事あり。日本の使の才能は奇異なり。書を読みしめて、その誤りを笑はんとす」と云々。吉備云はく、「何の書なりや」と。鬼云はく、「この朝の極めて読み難き古書なり。文選と号くとて、一部三十卷、諸家の集の神妙の物を撰び集むるところなり」と云々。(中略)「楼を閉じたり。争か出でらるべきや」と云ふに、鬼云はく、「我は飛行自在の術有り。到りて聞かんと思ふ」と云ひて、楼の戸の際より出でて、相共に文選の講所に到る。(以下略)

右の引用部分の鬼と大臣の会話の後には、(三)飛行術(『文選』講義所への飛行)が見られる。大臣は講義所で儒者の講義を一晚中聴き、『文選』を暗誦し難題解決の法を探った。

吉備入唐譚に限らず、飛行術は説話作品に出てくる方術で、例えば『日本霊異記』上巻の、「女人風声なる行を好み仙草を食ひて現の身に天に飛ぶ縁第十三」は、女の高潔さに感応した仙草を食べ女が昇天した話であり、また、『今昔物語集』巻第十一「久米仙人、始造久米寺語第二十四」では、飛行の秘術を体得した久米仙人が、愛欲の心を起こし女の前に落下した話である。この話はどちらにも神仙に關係すると思われるが、中国に起源を持つ神仙世界の仙人は『論衡』によれば、次に掲げる引用のように翼を有している。また、前漢時代の背に翼を持つ仙人像が西安から出土している。

仙人有翼、安足以驗長壽乎(仙人の翼有るも、安んぞ以て長壽を驗するに足らんや。)

(山田勝美『論衡上』新釈漢文大系68、無形第七末尾二一〇頁。)

この記事は、神仙と飛行とのかなり古くからの結び付きを示すものといえるだろう。

陰陽道術として飛行術は見当たらないが、神仙の術としては、窪徳忠氏が指摘するように、我々が仙人と呼ぶ存在は、中国では神仙といわれるとし、「前四世紀の後半から前三世紀の前半にかけてのころ、一部の人たちのあいだである空をとぶ存在が考えられていたことだけは事実とすべきだろう。そうして、方士が神仙説をとなえだしたころ、僊人という空想的な存在をつくりだし、その性格のひとつに空をとぶ存在という考え方を取り入れたのではないかと臆測される」との見解が提示されている。

また、下出積与氏も聖徳太子の伝承の不思議な現象として、「神馬とともに東国の富士や北陸に疾駆された行動は全くシナの神仙と類似のもので（『上宮聖徳太子伝補闕記』）、この場合の神馬はあたかも彼の地における鶴や竜に似た役割を演じている。」との所見を述べている。聖徳太子伝承における飛翔、飛行の例と同様、吉備大臣の入唐中の活躍の背景として、飛行術を使う鬼と同じく、大臣にも飛行能力が付与されたことが、幽閉という制約から大臣を解き放つ一つの機構となっていると考えられる。

この他『雲笈七籤』巻二〇「三洞經教部・太上飛行九神玉經」に、「飛歩」という雑術があるとされる他、『抱朴子』内篇の遐覽篇（傍線引用者）には、

玉女隱微一卷有り、亦形を化して飛禽走獸及び金木玉石と爲し、雲を興して雨を致すこと方百里、雪も亦之の如し、大水を渡るに舟梁を用ひず、形を分ちて千人と爲し、風に因りて高く飛び、無間に出入し、能く氣を吐きて七色となり、坐ながら八極及び地下の物を見、光を放つこと萬丈にして、冥き室も自ら明となる、亦大術なり。

とあり、傍線部のように、『玉女隱微』の術を使えば、風に乗じて高く飛び、無限の高空に出入できるとあり、神仙の飛行術の素晴らしさを説いている。

因みに『三教指帰』巻中の道教を論じた「虚亡隱士論」には次のような記述を見出せる。

〔訓読文〕上は蒼蒼に跨つて翱翔し、下は倒景を躡むで徭徠す。心馬に鞭うつて八極に馳せ、意車に油さして九空

に戯る。(日本古典文學大系71『三教指歸』)

〔現代語訳〕上は青空を踏んで天翔けり、下は太陽を足もとに眺めて思いのまま遊びあるく。心の馬に鞭うって宇宙をくまなく駆けめぐり、意の車に油さして天空をあまねく遊びまわり、(福永光司訳、『空海三教指歸ほか』中公クラシックスJ16)

右の引用部分の出典は、全体的に『文選』(何晏「景福殿の賦」、張衡「思玄賦」等)に拠るものであるが「倒景を躡む」は『抱朴子』対俗篇「虚に登り景を躡み」に拠っている。

匡房は晩年に『本朝神仙伝』も撰述しているが、そこには現在この書に伝えられる神仙三十一人のうち約三分の一(仙人の伝の番号と仙人は、2上宮太子、3役優婆塞、4泰澄、8報恩大師、11陽勝、12陽勝弟子童、14藤太主・源太主、21大嶺仙、22打仙、24中算上人童、26東寺僧)が、昇天或いは飛行能力を持つ、と井上光貞氏は指摘している。

『本朝神仙伝』という我国の仙伝を撰述した匡房は、神仙の存在に相当な興味、関心を持っていたことが窺える。このように見てくると、神仙思想にも通じていた匡房が、外祖父橘孝親から伝えられたとする、陰陽道方術を主とする吉備大臣入唐譚の鬼の飛行という自身の興味に合う怪異を語り、尊崇する吉備大臣の活躍を筆録させたのだと考えられる。

四、止瀉術

『文選』の試問で見事吉備大臣に謀られた唐人側は、更に、大臣の技芸を試すために、唐人との囲碁戦を仕組んでいる、との情報が鬼からもたらされた。吉備大臣は、楼の天井を使い囲碁を研究し一夜で「持」(引き分け)となるように囲碁を習得してしまった。いよいよ本番となり、碁石の白石を日本とし、黒石を唐土として勝負となった。大

臣は、唐土の囲碁の上手相手に「持」に持ち込み勝負がつかない局面で、唐土側の黒石を呑み込み、その結果唐側の負けとなった。唐人らは怪しみ碁石の数も確認のうえ、占いに占わせると、碁石は大臣が呑み込んだことが判明した。唐人は呵梨勒丸（通便の薬）を飲ませ呑み込んだ黒の碁石を出させようとするが、大臣は「止むる封」を使いついに日本の勝ちとなった。この話では、(四)止瀉術（腹中に碁石を止める固めの呪術）が使われている。

吉備大臣は、このように技芸にも優れていた事が分かるが、それでも危うく負けそうになり、窮余の一策として碁石を呑み込み、その後、呪術を使い勝つことができた。この展開は、唐人との接戦に持ち込み「持」となった後に、相手の碁石を呑み込み、さらにこれを腹中に止める「封」を使うという、話を面白くする工夫が見え隠れする。ここでも鬼の出現時や『文選』の試問同様、吉備大臣の危機の場面で「術」が使われ唐人に勝ちとなる。この話の裏には唐土対日本の文化的格差の意識も垣間見える。とにかく、唐土に勝ち唐人を圧倒するという事が、この入唐譚における吉備大臣の使命であったと思われるのである。

五、唐土の日月を封じ込める術

唐人の課す相次ぐ難問を乗り切ってきた吉備大臣に出された最後の難題は、僧宝志作の未来記「野馬台詩」の解説というものであった。漢字パズルのような未来記は何処から読むのか見当もつかないもので、帝王の前でこれを読めと言われた吉備大臣は目も眩み文字も見えない。そこで、心に遙か日本の仏神（住吉大明神・長谷寺観音）を祈念すると、一匹の蜘蛛が降りてきて、その糸を頼りに読むと、見事読み終えることができた。大臣の祈りは神仏に通じ、その験はたちまちに現れたが、ここには神仏の冥助が読み取れる。吉備大臣が遭遇した危難を救ったものは、大臣自身の方術だけでなく、日本の神仏の力でもあった。森克己氏も吉備大臣のこの祈りにふれ「こうして遣唐使の海洋航

海に際しては、乗船前や船中において航海の平安を神仏に祈ったのであり、わが国の神としては、最も住吉神社が崇仰され、仏としては観音、特に長谷寺観音が信仰の対象となった」と述べている^⑩。

「野馬台詩」の解説を目的の当たりにした帝王や未来記の作者宝志はひどく驚き、吉備大臣は再度楼に幽閉され食物も断たれてしまう。そこで大臣は、鬼の援助により当地の百年を経た双六の筒(棗)、篋、盤(楓)を揃えてもらい、次の本文のような秘術を行った。

篋を枰の上に置いて筒を覆ふに、唐土の日月封ぜられて、二、三日ばかり現れずして、上は帝王より下は諸人に至るまで、唐土大いに驚き騒ぎ、叫喚ふこと隙なく天地を動かす。

この術は、(五)唐土の日月を封じ込める術、ということになるが、引用本文の通り、唐土の社会は大混乱に陥った。それは方術といつても特定の個人を対象とするものではなく、日月をとともに封じてしまおうという、天空に変化を起こさせる秘術を行ったためであった。

唐人側は、この天空の異変を占わせた結果、術を使う者が日月を封じたのだと推測し、その者の方角も占わせると、吉備のいる所であった。吉備大臣は「我は知らず、もし我を冤陵せらるるによりて、一日、日本の仏神に祈念するに、自ら感念有るか。我を本朝に還させらるべくは、日月何ぞ現れざらんや」と答え、唐側も大臣を帰朝させることにし、「よりに筒を取れば、日月ともに現はる。」となり、吉備大臣は日本に帰ることができた。

ここで使われる方術は、初期の陰陽道家吉備大臣の方術の最大の見せ場と言えるだろう。前掲の村山氏は、この術について、「真備は鬼に命じて唐にある百年を経た雙六筒と篋盤(すごろくばん)をとりよせさせ、この筒と盤(多分天地の式盤であろう)を用いて日月を封じたため、天下暗黒で唐土は大騒動となった。」と述べている。式盤とは、陰陽道で使う「陰陽を推し吉凶を占ふに用ふる具」である。その形状は、円形の天盤と方形の地盤とから成り、十干十二支や二十八宿、方位が記され、吉凶を占うための道具である。

私見では、坂出祥伸氏が占いの背景をなす世界観としての「氣」の観念について、

前述の六壬式盤の場合は、天盤に示された天の十二分野に生じる星の異變現象がそれに對應する地の十二分野にもたらす災異を豫測する占いであるから、これもまた、天の氣と地の氣との相感という觀念に基づいていることは明白である。

と述べている点⁽⁴³⁾を踏まえれば、この式盤を使った唐土の日月を封じる術は、天地間の相感關係を応用し、式盤上の操作(術)を行うことで、地上から天空(日月)に向けて逆方向に異變を起こさせる秘術ではなかったかと推測している。吉備大臣は、この入唐譚の第2段で、鬼の出現に対し、「我はこれ日本国王の使^(つか)なり。王事^(わうじ)鹽^(しお)きこと靡^(な)し。鬼何ぞ伺ふや」と言っており、国王の使いとしての大臣の強い使命感が感じられるが、この第5段で大臣が方術を使った理由も、日本国王の使いである自分を幽閉し、更にその命を絶とうとする唐人側への最終手段の方術(呪詛)であったのだから。

壬申の乱勃発の際大海人皇子(天武帝)は横河で自ら式盤で天下の形勢を占っている。

横河^{よこがわ}に及^{いた}らむとするに、黒雲^{くろくも}有り。広^{ひろ}さ十余丈^{じゆじやう}にして天^{あめ}に經^{わた}れり。時に天皇、異^{あや}しびたまひ、則ち燭^あを挙^あげて親^{みづか}ら式^{しき}を乗り、占^{うらな}ひて曰^{のたま}はく、「天下^{てんか}兩分^{りやうぶん}の祥^{さむら}なり。然^{しか}して朕^{わがみ}遂^ひに天下^{てんか}を得^えむか」とのたまふ。(『日本書紀』卷第二十八天武天皇⁽⁴⁴⁾上)

天武帝は戦時で式盤を使い占っており、また吉備大臣も唐土での非常事態で、式盤を使う秘術を行っており、日本国王の使いとして国威をかけた方術であったということがわかる。

六、まとめ

ここで、本稿のまとめとしたい。このまとめでは、はじめに述べた次の各項についてそれぞれ総括をし、若干の

私見を加えておきたい。

I 『江談抄』吉備入唐譚で見られた吉備大臣の方術という機構による異界への越境と方術各々の思想的源泉を探り、本話に於ける方術の役割を考究したい。

II 儒者である匡房の異界との関わりや、院政期文化の諸思想の複合的役割も考察したい。

III 入唐譚を語る匡房の儒学者という枠に収まらない新たな匡房像を照射したい。

【I】吉備入唐譚での方術による異界への越境、及び方術の思想的源泉や役割

以上の吉備大臣入唐譚の(一)から(五)の方術の考察に基づいて、本話の中で方術というものがどのような役割を持つのか、ということについて何点か言及して本稿のまとめとしたい。

吉備大臣は、入唐して学問を学び、「諸道、芸能に博く達り、聡恵なり」ということであつたため「唐土の人すこぶる恥づる氣有り。」となり、唐人の不快感を買い楼に幽閉されてしまう。そこには文化先進国としての唐土のプライドがあり、一方、日本国の使である吉備大臣もまた、唐土に先進文化を学ぶ立場ではあつても、日本国王の使として国を背負つたプライドを持っており、両者の緊張関係の中でこの入唐譚は展開していく。

まともな対戦では聡恵な大臣に勝てない唐人は、難題を準備し大臣に恥をかかせる企みを実行するが、この危機的事態に現れたのが鬼(安倍仲麻呂の幽鬼)であつた。大臣は、鬼が見えた訳だから「見鬼術」が使えたことになるが、最初こそ鬼を警戒し「隱身の封」を使い我が身を隠すが、唐土で亡くなった鬼の事情を理解してからは、鬼の協力により、唐人の陰謀を切り抜けることになる。大臣は鬼と同じく「飛行術」を使い『文選』の試問で見事に唐人をやり込めるが、この構図は、唐人の陰謀対諸道に通じた大臣の方術と冥界の鬼の協力、という形になる。次なる謀略である唐人との囲碁戦に於いても、その情報は鬼により大臣に齎されており、唐人との勝負は大臣だけであつても、鬼の

存在は重要である。結局、大臣の碁石を飲み込む奇策と「止瀉術」により、この勝負は日本の勝ちとなる。これ以上負ける訳にはいかない唐人は周到な準備をして、大臣に「野馬台詩」解説を課した。この緊迫した場面で大臣は日本の神仏の冥助により危難を脱するが、怒った唐人は再度大臣を楼に閉じ込め餓死させようとする。この絶体絶命の危機を救ったものは、やはり大臣の「唐土の日月を封じる」という超人的な方術であった。

本入唐譚に見える方術はその多くが、所謂神仙術であるという有機的な連関で見ることがができる。窪徳忠氏が各種の道教文献から集めた方術は、本入唐譚に登場する方術と重なっている（私見では隱形法、役鬼狐法、迅行符等が吉備入唐譚と関連する）。吉備真備が日本陰陽道史上の初期の陰陽家である（安倍清明以前には、真備は陰陽道の始祖とされている。）点をふまえれば、その背景には、日本に於ける道教文化の問題が浮かび上がる。

匡房が外祖父橘孝親から伝えられたと言う吉備大臣入唐譚の構図は、基本的に唐人の陰謀対諸道に通じた大臣の方術と冥界の鬼の協力、という形と考えられるが、他にも様々な視点から解釈しうる。本入唐譚に於ける方術の役割は次の(1)と(2)の二重の働きをしている。

- (1) 唐土対日本の文化的対決という対立軸に介在し、この話の展開を左右する働き。
- (2) 現世対異界、という対極的な二つの世界に跨り、両界の通交手段となる働き。

【II】匡房の異界への関わりと院政期文化の複合的役割

吉備大臣の話に鬼が登場する要因として、匡房が生きた院政期の時代相と、匡房の興味、関心の在り処も考えなくてはならないだろう。この当時は、史家が指摘するように、終末思想主流の不安要素の多い時代であった。世上の妖異については、川口久雄氏が指摘するように、康和三年（一一〇二）京都に狐妖の変があり匡房は『狐媚記』（原文漢文）を記している。その末尾には「嗟乎、狐媚の変異は、多く史籍に載せたり。殷の妲己は、九尾の狐と為り、任氏は人の妻と為りて、馬鬼に到りて、犬のために獲られき。（中略）今我朝にして、正にその妖を見たり。季の葉に及ぶと

いへども、怪異古いにしへのごとし。偉あやしきかな。」と都の恠異が問題化し、社会不安が現実に身近に及んできた感想を綴っている。怨霊や生霊が跋扈し、天変地異や兵乱が相次ぐ世相は、庶民から貴族、天皇に至るまでその心理状態は、不安が大きく翳を落としていたものと想像される。人々は仏事（例えば六勝寺と総称される御願寺の建立など）や熊野詣による魂の救済を求めており、このような世相を反映して、第二節でも引用したように「日本陰陽道形成の頂点をなす時期」（村山修一氏）でもあった。

またこの入唐譚に各種の方術が登場するのは何故かという点も掘り下げる必要がある。院政期文化を解明する鍵として、私は小川剛生氏の指摘する「類聚」という言葉が重要な視点ではないかと考えている。小川氏の論考(43)の主たる内容は、書物の蒐集、管理であるが、院政期文化を特徴づけるキーワードとして、「同種の事物を集成すること、またその集成物」を「類聚」という、と述べている。その例として後白河法皇の蓮華王院の千体千手観音や、和歌資料を集成したらしい『扶桑葉林』や詩文の『本朝文粹』、明法道の『法曹類林』等を挙げている。翻つて本入唐譚を見れば、隱身術や見鬼術等々の方術の「類聚」という側面を持っているのである。私見では『今昔物語集』の三国（世界）に亘る膨大な説話群も「類聚」の一例であろう。匡房はこの入唐譚に於いて方術の「類聚」を試みたとも言えるのであり、それは院政期文化の一断面としての特徴を示しているのではないだろうか。またそれは次項Ⅲのような匡房の興味、関心の方面と思想的に一致しているのである。

【Ⅲ】新たな匡房像への照射

匡房は儒者として大江家の学統を継ぎ、博覧強記の碩学であつたが、その興味、関心は多岐に亘り、例えば仏教を深く信仰し、高野大師を尊崇していたといわれている。また、『本朝神仙伝』を撰述し、我国の神仙の迹を記し、陰陽家としても夢占いや改元勘申を行つている。堀河天皇の御病氣に際しては易筮のため内裏に召されており、呪術師の傾向も持つていたとされる(30)。このように見てくると、匡房が碩儒という枠に収まらない幅広い興味を持つ学者であ

り、また陰陽道や呪術、占いにも通じていた人物であることがわかる。院政期に生きた碩学匡房は、院政期の複合的文化と同じくその能力も多才なものであった。

本稿で扱った『江談抄』吉備入唐譚では、そこに盛り込まれた不可思議な方術の数々が、この話を語る匡房の興味、関心に重なるという点でも重要である。本稿では方術を織り交ぜた吉備入唐譚を語り『狐媚記』を著わし、儒者でありながら「怪・力・乱・神」を語る特異性が、匡房の思想解明の基底に置かれるべき重要事項である事を再確認しておきたい。

註

- (1) 宮田俊彦『吉備真備』（吉川弘文館、平成二十五年）四五頁。
- (2) 青木和夫他校注『続日本紀二』（岩波書店、新日本古典文学大系13、平成二年）二八九頁。
- (3) 堀越光信『扶桑略記』撰者考（『皇學館論叢』第十七卷第六号、皇學館大學人文學會、昭和五十九年十二月）
- (4) 黒板勝美編輯『扶桑略記』第六（新訂増補國史大系第十二卷、吉川弘文館、平成十五年）
天平七年乙亥四月辛亥日条「入唐留學生從八位下々道朝臣真備（中略）留學之間歷十九年。凡所傳學。三史五經。名刑筭術。陰陽曆道。天文漏刻。漢音書道。秘術雜占。一十三道。（以下略）」なお「一十三道」の区切り方は新日本古典文学大系32『江談抄』六八頁、脚注一二に引用する『扶桑略記』の区切り方に拠る。
- (5) 平林盛得「往生伝と江談抄——大江匡房の晩年——」（『國文學解釋と鑑賞』第三十七卷四号、昭和四十七年、「聖」と説話の史的研究」吉川弘文館、昭和五十六年所収）
- (6) 拙稿『江談抄』吉備大臣入唐譚の意味するもの——大江家学の始祖説話——（『國文學試論』第27号、大正大学大学院文学研究科、平成三十年二月）
- (7) 出雲路修校注『日本霊異記』（新日本古典文学大系30、岩波書店、平成八年）六〇頁。

- (8) 註(7)引用本文では「長屋親王」とされるが、『続日本紀二』巻第十(新日本古典文学大系13、岩波書店、二〇五頁)天平元年二月十日条に抛り「長屋主」とする。
- (9) 中田祝夫校注・訳『日本靈異記』(日本古典文学全集6、小学館、昭和五十年) 一四六頁。
- (10) 池上洵一校注『今昔物語集三』(新日本古典文学大系35、岩波書店、平成五年) 二五〇二六頁。
- (11) 高橋貢・増古和子『宇治拾遺物語上』(講談社学術文庫2491、平成三十年) 二二七〇二二六頁。
註(11) 二二二頁。
- (12) 横手裕『中国道教の展開』(山川出版社、平成二十年) 五〇〇五六頁。
- (13) 坂出祥伸『道家・道教の思想とその方術の研究』(汲古書院、平成二十一年) 一七三頁。
- (14) 織田得能『織田佛教大辭典』新訂重版(大藏出版、昭和五十二年) 一二九頁、一五四頁。
註(15) 一二九頁。
- (16) 今野達校注『今昔物語集一』(新日本古典文学大系33、岩波書店、平成十一年) 三四七頁脚注。
- (17) 陳永正主編『中國方術大辭典』(中山大學出版社、一九九一年) 五九五頁。
- (18) 王明『抱朴子内篇校釋』增訂本(新編諸子集成、第一輯、中華書局、一九八五年) 二〇頁。
- (19) 石島快隆訳注『抱朴子』(岩波文庫、昭和十七年) 四五頁。
- (20) 本田濟訳注『抱朴子内篇』(東洋文庫512、平凡社、平成二年) 三九頁。
- (21) 註(19) 二八四頁。
- (22) 註(20) 二七三〇二七四頁。
- (23) 註(21) 三二七頁。
- (24) 永積安明・池上洵一訳『今昔物語集4』(東洋文庫104、平凡社、昭和四十二年) 一二三頁。
- (25) 窪徳忠『道教史』(世界宗教史叢書9、山川出版社、昭和五十二年) 四二頁。

- (27) 中村璋八「陰陽道における道教の受容」(選集道教と日本第二卷『古代文化の展開と道教』、雄山閣、平成九年、所収) 一四五～一六三頁。拙稿のこの引用に続く、中村氏の見解も同論考に拠る。
- (28) 既に「急々如律令」は、この他、藤原実資(九五七～一〇四六)『小野宮年中行事』(『羣書類從』第五輯、公事部六)正月の「元正朝。拜天地四方屬星及二陵事。」にも見える。
- (29) 『通憲入道藏書目録』(長澤規矩也・阿部隆一編『日本書目大成』第一卷、汲古書院、昭和五十四年所収) 四七頁。
 ※以下の抜粋で括弧内は分ち書きの部分である。
 「一合第一櫃周易一部十卷(九箇卷・卷欠卷十) 同注疏經一部十卷周易副象二卷(上下) 周易集注二卷四五易通統卦驗玄圖一卷周易畧例二卷(一卷注・一卷疏虫損) 周易音義一卷」
- (30) 村山修一「陰陽道」(『国文学解釈と鑑賞』別冊『平安時代の信仰と生活』、至文堂、平成四年、所収) 七九～一〇一頁。
 (院政期陰陽道については、八三～八五頁。)
- (31) 註(7) 二六～二七頁。
 (32) 註(10) 六八～七〇頁。
 (33) 渡辺昌宏「描かれた神仙世界」(『中国 仙人のふるさと——山東省文物展——』山口県立萩美術館・浦上記念館、平成九年) 七六～八〇頁。
- (34) 註(26) 七一～七六頁。
 (35) 下出積与『神仙思想』(日本歴史叢書22、吉川弘文館、昭和四十三年) 五三頁。
 (36) 註(18) 五九三頁。
 (37) 註(20) 三四三～三四四頁。
 (38) 註(20) 六一頁。
- (39) 井上光貞、大曾根章介校注『往生傳法華驗記』(日本思想大系7、岩波書店、昭和四十九年) 七三四～七三七頁。

- (40) 森克己『遣唐使』（日本歴史新書、至文堂、昭和四十一年）六六～六七頁。
- (41) 村山修一『日本陰陽道史総説』（塙書房、昭和五十六年）六七頁。
- (42) 齋藤勵『王朝時代の陰陽道』（原版発行大正四年、覆刻版、藝林舎、昭和五十一年）一四七頁。
註(14) 二二五頁。
- (43) 小島憲之他校注・訳『日本書紀③』（新編日本古典文学全集4、小学館、平成十年）三二三頁。
- (44) 窪徳忠『道教百話』（講談社学術文庫875、平成元年）一一四～一七一頁。
- (45) 川口久雄『大江匡房』（吉川弘文館、平成元年）二九四～二九五頁。
- (46) 大曾根章介校注『狐媚記』（山岸徳平他校注、日本思想大系8『古代政治社會思想』岩波書店、昭和五十四年）一六五～一六八頁。
- (47) 小川剛生『中世の書物と学問』（山川出版社、平成二十一年）六一～六五頁。
- (48) 註(46) 二二三～二二三頁。
- (49) 註(46) 二八九頁。
- (50) 註(46) 二八九頁。